

埴輪の復古再生と土師氏

村瀬 陸

はじめに

本稿は、埴輪の復古再生に関する基礎的分析を土師氏としてのまとまりに着目しながら行うことを目的とする。

古墳時代の器物に長期保有や復古再生といった現象がみられることは、その価値と連動して理解されてきた。他方、埴輪は古墳の外装施設を構成する器物のひとつであり、それ自体に極端な価値を見出すことは一般的に考えにくい。しかし、埴輪のなかにもいくつか復古再生・再利用された事例が認められる。こういった事例がどのような価値観をもとに理解できるのかを考察する。

1. 埴輪の復古再生とその事例

復古再生の条件は、①時間的な断絶があること、②デザイン的な継承性があること、を満たす場合と設定した上で検討する。以下ではまず、埴輪にこの現象がみられるものを確認する。

(1) ウワナベ古墳出土埴輪

概要 ウワナベ古墳は、奈良市に所在する佐紀古墳群東群の一角をなす大型前方後円墳である。これまで、墳丘の調査〔宮内庁 2022、榎考研 2022、奈良市教委 2023〕、内堤の調査〔奈文研 1975、大澤 2022〕、外堤の調査〔榎考研 2008〕が行われ、ほぼすべてに鱗付円筒埴輪を配列していたことがわかっている。埴輪は窖窯焼成である埴輪編年Ⅳ期、造出しで表採された須恵器は TK216 型式に位置づけられており、概ね 5 世紀前半の古墳と評価できる。

ウワナベ古墳出土埴輪で復古調と指摘されているのは、鱗付円筒埴輪である。鱗付円筒埴輪は、4 世紀前半の東殿塚古墳が最も古い事例であることから大和古墳群で出現したと考えられる。その後、鱗部の型式変化〔鐘方 2003〕からみて脈々と生産が続き、4 世紀中頃～後半に大和・佐紀古墳群を中心とする近畿地方で盛行期を迎える。しかし、4 世紀末以降には普通円筒埴輪が再び主流となり、鱗付円筒埴輪は衰退する。だからこそ、5 世紀前半のウワナベ古墳出土鱗付円筒埴輪は復古的なものとして評価されてきた。

佐紀古墳群の埴輪変遷 佐紀古墳群では埴輪編年Ⅱ期の画期に合わせて古墳の造営が始まる。最古期の佐紀陵山古墳は様相が不明確であるが、隣接するマエ塚古墳ではⅡ期前半の形象埴輪とともに鱗付円筒埴輪が出土している。周辺では宝来山古墳とその陪塚とみられる平松北内古墳、他に富雄丸山古墳や金光古墳などでⅡ期の鱗付円筒埴輪が出土している。また、Ⅱ期後半とみられる五社神古墳や鶯塚古墳でも若干数の鱗付円筒埴輪が出土している。

一方、Ⅲ期では大型前方後円墳であるコナベ古墳に鱗付円筒埴輪はみられない。周辺の同時期の古墳をみても、鱗の破片すら確認されておらず、これらの埴輪を生産したとされる平城宮東院下層埴輪窯でもⅢ期に相当する鱗付円筒埴輪は出土していない。

そして、Ⅳ期にはウワナベ古墳のほぼすべて、南新コモ川 2 号墳、ヤイ 2 号墳などの周辺に位置す

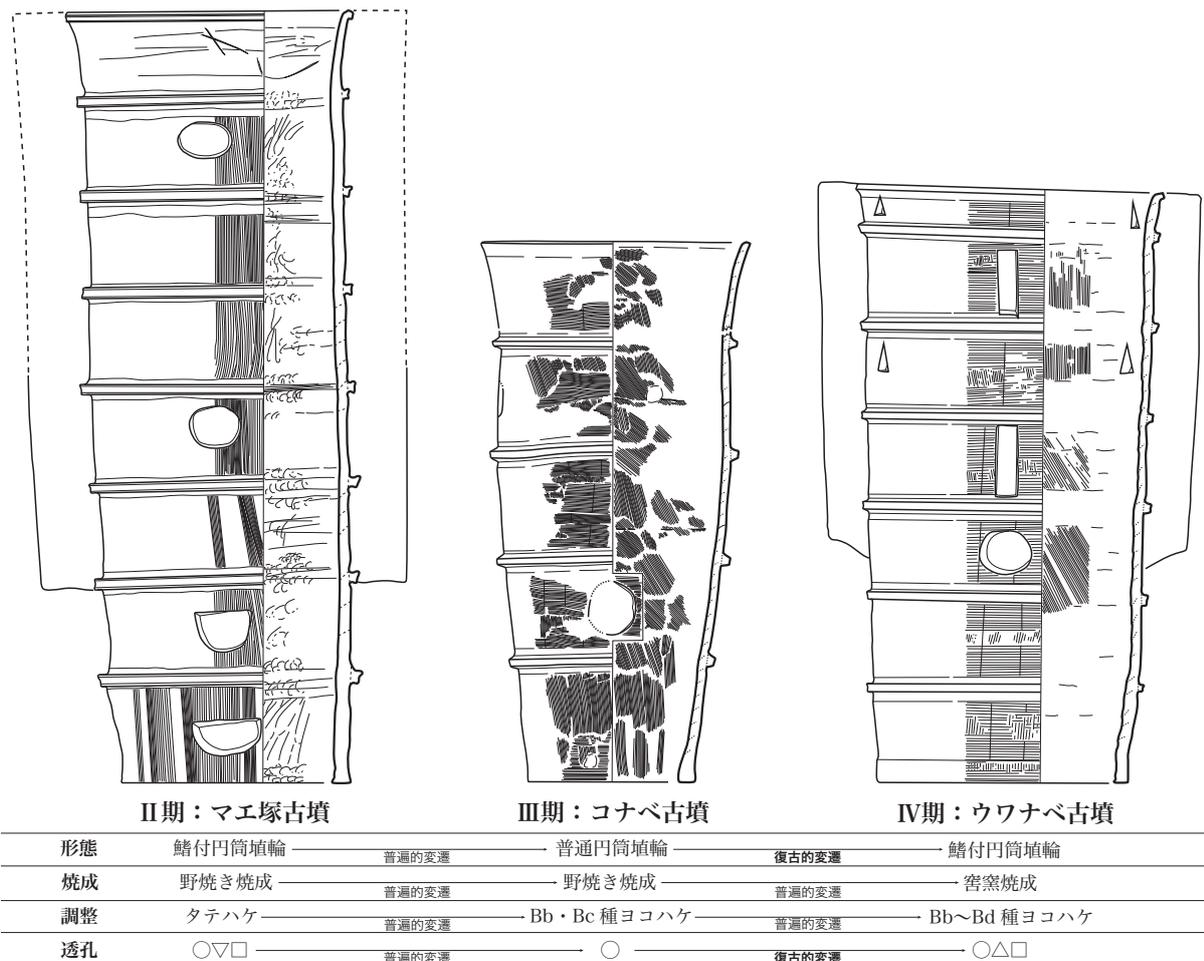


図1 佐紀古墳群におけるII～IV期埴輪の普遍・復古的変遷 1/10

る小規模古墳にも同様の鱗付円筒埴輪が供給される。ただし、これらの鱗付円筒埴輪は窖窯焼成でBc・Bd種ヨコハケがみられ、底部高や突帯間隔といった規格もII期の埴輪と比較すると縮小しており、転用したものではなくこの時期に新たに生産されたものであることがわかる。

このように、佐紀古墳群とその周辺の動向をみると、II期に盛行した鱗付円筒埴輪がIII期に断絶し、IV期にデザインを継承した復古再生が生じたとみることができる。

コナベ-ウワナベ古墳出土埴輪の系統 以上のように、佐紀古墳群としてみた場合に鱗付円筒埴輪は復古再生しているように見える。ここでは、その系統性を明らかにする。

コナベ・ウワナベ古墳出土埴輪は、それを製作した場所が平城宮東院下層埴輪窯であることが判明している[大澤2021]。ただし製作地が同じでも、担い手や集団が異なる可能性はある。むしろ、そういった場合にこそ変化がみられるのが一般論である。

しかし筆者は以前、コナベ-ウワナベ古墳出土埴輪間に規格の共有関係が認められることを示した[村瀬2022]。一般に、II期からIV期への埴輪変遷は、底部高や突帯間隔が縮小していく傾向にあることが知られている[木村2022]。ただし、この傾向は平均値をとった統計的結果で、例えばコナベ古墳の場合は底部高と突帯間隔の関係性から大きく3つの規格(コナベA～C規格)があることを明らかにした。そして、ウワナベ古墳出土埴輪も同じ規格を採用して割付を行なっているが、小さい規格の採用比率が増加していることがわかった(コナベ古墳はA:B:C=44%:44%:12%、ウワナベ古墳は

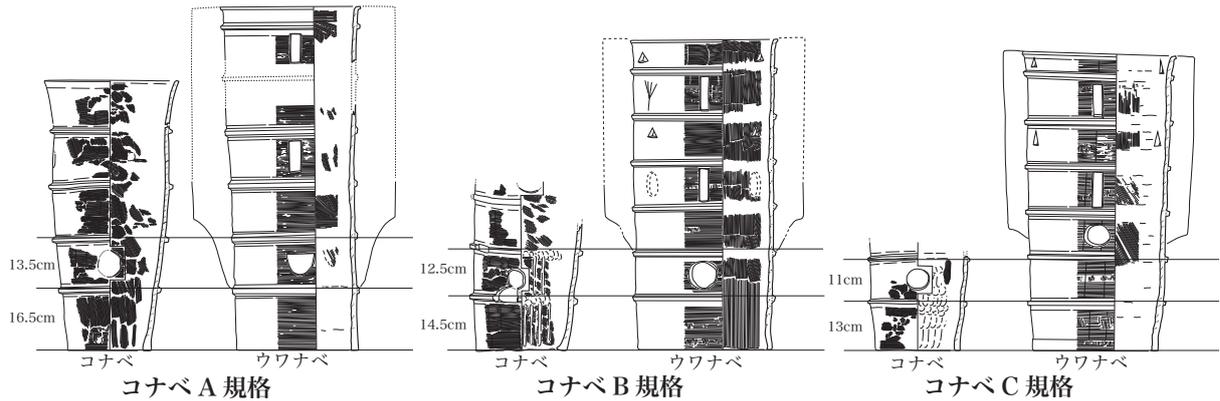


図2 コナベ-ウワナベ古墳間の規格共有関係 1/20

A : B : C = 16% : 42% : 42%)。つまり、法量が漸次的に縮小するのではなく、法量分化した規格の採用比率が縮小した規格へと推移していくのである。仮に、ウワナベ古墳出土埴輪の製作集団がコナベ古墳のそれと異なる場合、こういった規格の共有関係はみられないはずである。つまり、製作地が同様であることに加えて、規格の共有が認められることは集団の同一系統性を担保する根拠になると判断できる。

属性の断絶・連続性 佐紀古墳群では、鱗付円筒埴輪の復古再生が系統的に担保されたなかで生じていることを示したが、復古要素の断絶・連続性についても確認する。

まず、鱗付円筒埴輪が復古再生したと評価する上で、どの属性が復古再生であるのかを個別に提示すると、①鱗、②三角・長方形透孔、③口縁部高を短く割り付ける（割付3式）が主にある。この特徴を一括でもつものがⅡ群埴輪であるため、それらをすべてもつウワナベ古墳出土埴輪は復古的形態であると評価できる。佐紀古墳群においてⅢ期に認められるのは②のみで、①・③は今のところコナベ古墳をはじめとするⅢ期の古墳からはみつからない。

つまり、ウワナベ古墳の鱗付円筒埴輪を製作する場合、鱗の貼り付け、および口縁部高を短く割り付けるといった概念は世代を越えた伝達、あるいはⅡ群埴輪の樹立状況を視認することでしかなくないことがわかる。したがって、属性の一部は連続的と考えることもできるが、連続性のある属性を集合させてウワナベ古墳出土鱗付円筒埴輪を生み出したと考えることは困難である。

他地域の動向 前述した①～③の属性について近畿地方における大型古墳群での動向を確認する。①については、百舌鳥古墳群の七観古墳出土埴輪（Ⅳ-1期）に鱗付円筒埴輪が認められる。ただし、墳頂部のみの特異なもので、円形透孔をもち口縁部高も短いものではなく、鱗という属性のみが復古的である。直前のⅢ期についても、上石津ミサンザイ古墳（百舌鳥）、墓山古墳（古市）、乙女山古墳（馬見）で少数ながら確認されており、同時期の兵庫県行者塚古墳では墳頂部など限定的に鱗付円筒埴輪が確認された事例があるので、主流ではないが一部系統として残存した可能性はある。

②については、古市古墳群の狼塚古墳（Ⅳ-1期）で円形透孔を主体としつつ、1点長方形透孔の個体がある。ウワナベ古墳に類似する口縁部等に小三角形透孔をもつものは、馬見古墳群の川合大塚山古墳、百舌鳥古墳群の御廟山古墳（いずれもⅣ-1期）に少数であるが認められる。直前のⅢ期では、コナベ古墳に少数ながら長方形等の透孔がみられるように、百舌鳥・古市・馬見古墳群でも円形透孔を主体としながらも、若干異なる形状の透孔をもつものがある。

③については、百舌鳥古墳群：御廟山古墳、古市古墳群：菅田御廟山古墳、馬見古墳群：川合大塚山古墳を中心としてⅣ-1期を中心に事例があることから、当該期の大型古墳群における埴輪生産で

共有された規格の認識であった可能性がある。ただし、ウワナベ古墳と同様に一時的にみられるもので以後連続性のあるものではない。また、直前のⅢ期に認められない点も佐紀古墳群と同様の傾向を示す。

このように、取り上げた3つの復古的属性は、近畿地方に視野を広げた場合、鱗や透孔などは少数派であるものの、Ⅲ・Ⅳ期の連続性が認められる。佐紀古墳群では現状Ⅲ期に鱗はみつかっていないが、類例からみてコナベ古墳の墳頂部にだけ配列していた可能性は排除しきれない。よって、古い作りを維持した少数派の集団がⅣ期になって中心的製作集団となった結果、ウワナベ古墳の鱗付円筒埴輪が成立したと考えることもできる。しかし、そのためにはⅢ期に順当な型式変化にみる生産を担ってきた大多数の集団が、古い作りに戻って製作する必要がある、その集団にとってみれば復古再生的生産となる。また、少数派の系統としては復古的でなく連続的と評価できるかもしれないが、前述したコナベ・ウワナベ古墳間の規格的連続性や平城宮東院下層埴輪窯での連続性を考慮すれば、生産体制自体は復古再生を果たそうとしたことを読み取れる。

評価 以上、ウワナベ古墳出土鱗付円筒埴輪の復古再生現象を理解するために、他地域を含めた動向を精査した。まず注目すべき点は、Ⅳ-1期に佐紀・古市・百舌鳥・馬見古墳群のすべてに口縁部高を短く割り付ける個体が見られることである。埴輪規格の変遷として、Ⅱ群埴輪には口縁部高を短く設定する割付2・3式が用いられる[鐘方2003]が、次第に口縁部高を突帯間隔と同様に割り付けるようになり、Ⅲ群ではそれが一般化する。Ⅳ-1期にみられる低口縁の個体はいずれも口縁部高を1/2突帯間隔で割り付ける割付3式であり、いわば設定工具が復古した結果を間接的に示している。このような現象が同時期に起こることは偶然ではなく、大型古墳群間での情報共有が前提として存在し、一定程度工人集団の往来関係があったことを示唆する。このことは、特徴的なヘラ記号が共通することも加えて指摘できる(図3)。

一方、鱗や円形以外の透孔といったⅡ群埴輪のさらなる特徴を兼ね備えたのはウワナベ古墳出土埴輪のみである。仮に、佐紀古墳群が割付3式による低口縁円筒埴輪生産の情報発信源(モデル)であれば、他地域でも鱗や透孔の復古がみられるはずである。そうではないということは、あくまで佐紀古墳群は情報を受容する側であったことが想定できる。

そこで、発信源を考えた場合、状況的には同時期最大の前方後円墳である古市古墳群の誉田御廟山古墳がふさわしい。誉田御廟山古墳の埴輪は、外堤に貼付突帯口縁の個体を意識的に樹立させており、おそらく墳丘との差をつけたものとみられる。墳丘資料は不明確であるが、陪塚であるアリ山・東山

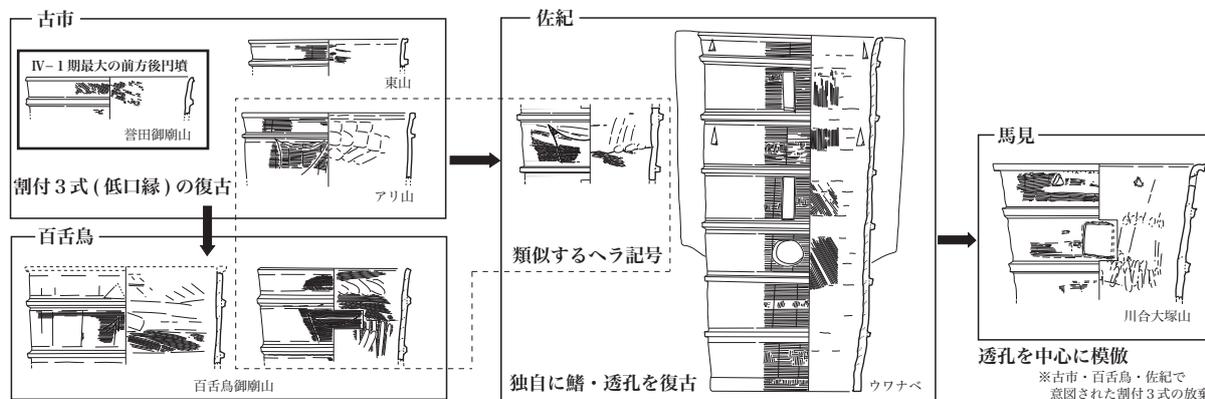


図3 大型古墳群における復古属性の関係

古墳等では貼付突帯口縁とともに低口縁の個体が一定数出土している。このことから、古市古墳群では菅田御廟山古墳の築造を契機として、割付3式を用いた形態的復古再生が行われたと考えることができる。

この情報が、百舌鳥・佐紀古墳群へと伝達した結果、それぞれの地でも低口縁の個体が生産されたとみられる。ただし、同様に情報を受け取りながらも百舌鳥御廟山古墳では古市古墳群と同じように割付3式としての形態的復古のみであるが、佐紀古墳群では鱗や透孔といった属性まで復古させている。当時の概念としても、低口縁である割付3式での製作は、古い作り方かつ形態であることを認識した上で復古させているとみられる。その場合、百舌鳥・古市古墳群では鱗や円形以外の透孔である埴輪を樹立した古墳がほとんどない一方、佐紀古墳群ではむしろ前段階のコナベ古墳が画期的でⅡ群埴輪を樹立した古墳の方が多い。そういった環境的条件が揃う佐紀古墳群だからこそ、低口縁という形態の復古が古市古墳群から発信された際に、Ⅱ群埴輪のより忠実な復古を目指しやすかったであろう。このことが、古市古墳群から百舌鳥・佐紀古墳群へ情報伝達された後の差を生む原因と考える。また、鱗などの少数派である属性が再び増加することで連続性を維持した生産のあり方を可能性として前述したが、上述した低口縁円筒埴輪の発信と受容、および古墳群ごとの属性のあり方からみれば、少数派である集団が再び主体となった結果と考えるのは困難であり、あくまで復古再生を意図した結果と考えるのが適切であろう。

なお、馬見古墳群における川合大塚山古墳は、墳丘には普通円筒埴輪が基本であるとみられるが、外堤には口縁部がやや短く、小三角形・方形透孔をもつ個体がみられる。ただし、口縁部が割付3式で短く設定されておらず、透孔もウワナベ古墳の長方形のものに比べて正方形に近い模倣的な作りにみえる。したがって、古市古墳群からの直接的な情報伝達ではなく、ウワナベ古墳の埴輪生産を伝聞して製作した佐紀（ウワナベ古墳）→馬見古墳群（川合大塚山古墳）の情報伝達を想定できる。このような古市・佐紀古墳群が百舌鳥・馬見古墳群へ情報伝達する関係性は、木村理が埴輪生産体制から分析した結果とも一致する〔木村2020〕。

このように、ウワナベ古墳出土鱗付円筒埴輪は、総合的にみて復古再生した器物であると評価できる。ただし、Ⅱ群埴輪の規格を復古させようとする意識は当該期最大の前方後円墳である菅田御廟山古墳が契機である可能性が高く、それが佐紀古墳群へ伝達したとみられる。そのなかで、佐紀古墳群では独自に復古的属性を追加することで、より復古的な埴輪の製作を果たしたと考えられる。

（2）今城塚古墳出土埴輪

概要 今城塚古墳は、大阪府高槻市に所在する大型前方後円墳である。これまで、墳丘各所の調査・整理作業が進められており、埴輪はV-3期、須恵器は概ねMT15～TK10型式に位置づけられる。現在継体天皇陵に治定されている太田茶臼山古墳は埴輪編年Ⅳ期に位置づけられることから、今城塚古墳を真の継体陵とするのが一般的な認識である。

今城塚古墳出土埴輪で復古調と指摘されてきた〔小浜2008〕のは、円筒埴輪にみる貼付突帯口縁や凹線による突帯間隔の設定などの特徴である。また、形象埴輪にみる蓋形埴輪の肋木表現や甲冑形埴輪の方形板表現なども同時期としては珍しく、古い特徴を表したものである。

属性の断絶と連続性 蓋形埴輪に肋木が付属するのは、埴輪編年Ⅱ期の出現期事例に多く以後衰退する。ただし、百舌鳥・古市古墳群では少なからず大型古墳で肋木の残存する事例がある（Ⅳ-1：菅田御廟山古墳、Ⅳ-3：土師ニサンザイ古墳など）ほか、全国的にみても少数派であるが肋木はほぼ全時期に確認されている〔小栗2007〕。とはいえ、埴輪編年Ⅲ期以降で肋木が出土する古墳も主体とな

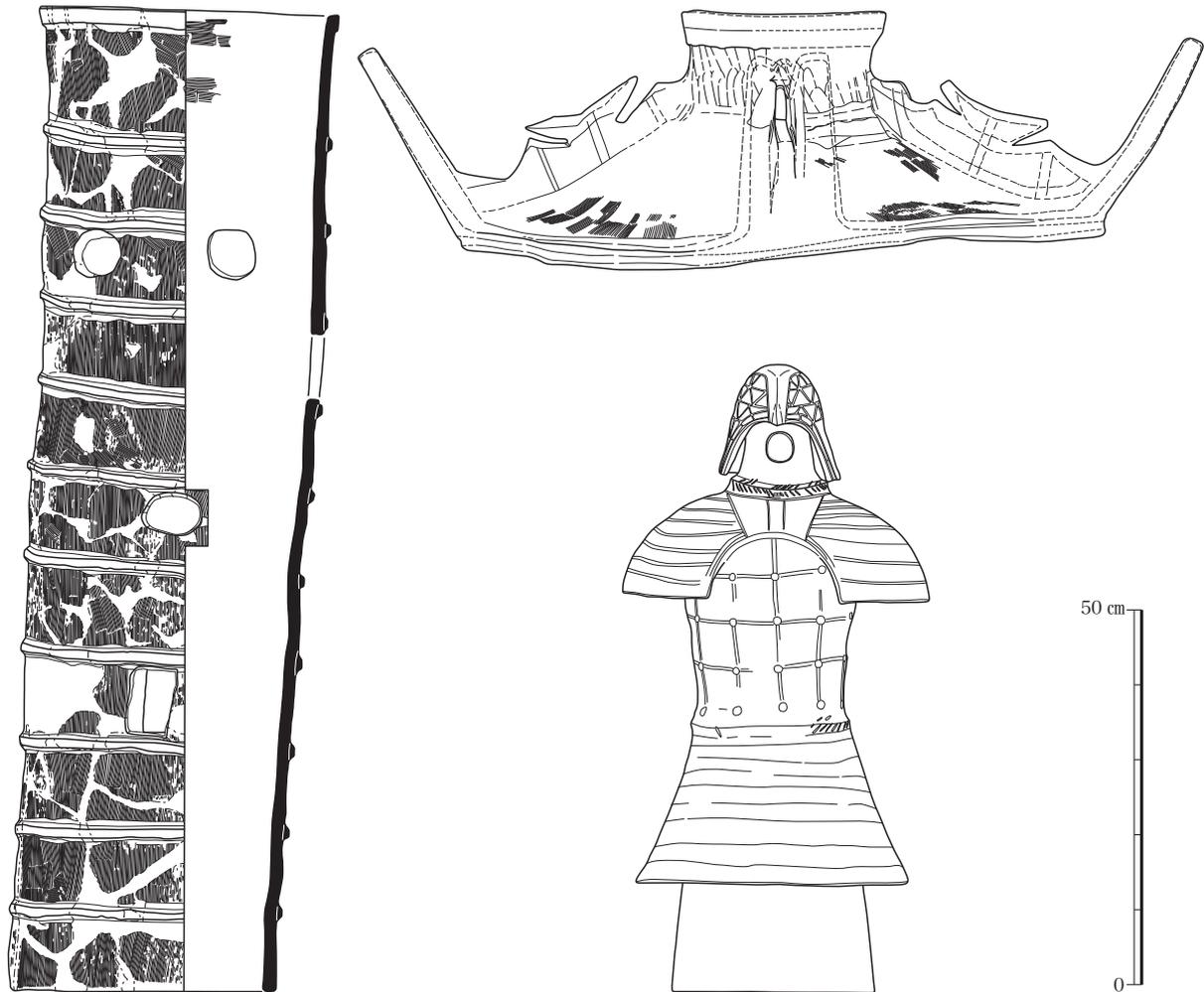


図4 今城塚古墳の復古的とされる埴輪 1/10

るのは肋木がつかない蓋形埴輪である。このことから、現状の資料でみると少数派の系統として肋木付蓋形埴輪は王陵級埴輪生産集団のなかで連続的であったと考えられる。

三島古墳群では太田茶白山古墳が比較対象になるが、蓋形埴輪の出土がなく不明確である。周辺で蓋形埴輪が出土しているⅢ期の前塚古墳、Ⅳ期の土保山古墳・ツゲノ古墳群・弁天山D四号墳などにも肋木はみられず、これらの多くを生産した新池遺跡埴輪窯（A・B群窯）でも肋木片は出土していない。つまり、三島地域に肋木を有する蓋形埴輪の下地は見受けられない。しかし、後期には今城塚古墳の埴輪を新池C群窯で製作していたことがわかっており、今城塚古墳同様に肋木片の出土が認められる。窯自体は一見、5世紀から6世紀にかけて連続的な生産であるように見えるが、出土埴輪は生産・供給地ともに連続性が認められず、Ⅳ-Ⅴ期の間で生産集団の再編成があったことを想定できる。つまり、今城塚古墳が継体陵である可能性が高いこと、6世紀段階の新池窯における埴輪生産に再編成とみられる様相の変化が認められることを評価すれば、すなわち王陵級埴輪生産集団が外的に新池窯での生産に送り込まれたとみることができよう。三島地域には肋木を復古再生し得る下地がなく、今城塚古墳の性格からみても王陵級埴輪生産集団からの系統的連続性で理解するのが妥当である。

次に、甲冑形埴輪で方形板を表現するものは、埴輪編年Ⅱ～Ⅲ期に多いがそれを備えるものは高橋分類A型式〔高橋1991〕であり、今城塚古墳出土埴輪はB型式である点で、表現の一部が古くみ

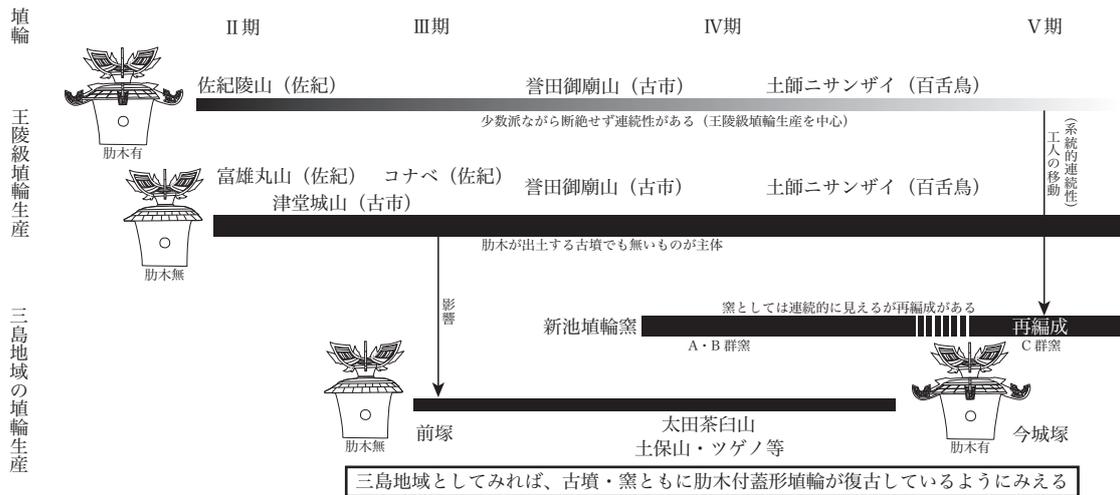


図5 系統と地域からみた埴輪の復古概念

えるというのが正しい。ただし、方形板であるが頂点に鋸状の粘土粒が貼り付けられており、革綴であるはずの鉄製甲冑の動向を把握しきれていない。このことから、実物ではなく埴輪化したものをもとに古い特徴を取り入れているものと考えられる。加えて、そもそも埴輪編年V期になると甲冑形埴輪は作られなくなり、武人埴輪等へ置き換わっていく。そういったなかで、甲冑形埴輪が作られていること自体も復古的である。甲冑形埴輪についても、三島地域では太田茶白山古墳や土室遺跡（IV期）では三角板を表現しており、全国的な変遷観と一致する。よって、方形板の表現自体は断絶したものとみなすことができ、今城塚古墳の段階で復古した可能性がある。ただし、王陵級古墳での様相が不明瞭なため、肋木のような連続性がある可能性も否定できず、突き詰めた議論は困難である。

円筒埴輪は、V群になると断続ナゲ技法を採用し突帯間隔を設定しなくなるのが一般的である。一方、今城塚古墳出土埴輪は突帯間隔を設定している点で古い作りを維持しており、貼付突帯口縁をもつものも古い属性であるとみることができる。しかし、花熊祐基が指摘するように、古市古墳群の大型古墳では、V群埴輪が共伴する岡ミサンザイ古墳や峯ヶ塚古墳などで突帯間隔設定技法や貼付突帯口縁をもつものが普遍的に出土しており、そこからの連続性と考えることもできる [花熊2022]。このことは、蓋形埴輪でみた傾向と全く同じ状況であり、円筒・形象埴輪を総合的にみることで、生産系統としての連続性は認められるが、地域としてみた場合に一見復古しているように感じる、という現象を説明できる事例である。

評価 以上のように、今城塚古墳出土埴輪はかねてより復古調と評価されることがあったが、なにをもって「復古」とするかを考える上で良好な事例である。つまり、三島地域としてみた場合には、確かに生産・供給地ともに埴輪の様相は断絶し復古しているようにみえる。しかし、そもそも三島地域には復古対象となる前代の埴輪が存在しない。また、今城塚古墳が継体天皇陵である可能性が高く、その生産系統が王陵級埴輪生産集団に求められるとみれば、蓋形埴輪や円筒埴輪のように、系統的には連続性を認めることができ復古とは評価できないのである。ただし、ウワナベ古墳の事例のように、古い属性を維持する系統は王陵級埴輪生産集団でも少数派であるとみられる。よって、ウワナベ古墳出土埴輪を復古再生的生产体制と結論づけたように、王陵級埴輪生産集団としてもそれまで以上に今城塚古墳築造段階での復古を意図した可能性はある。これについては5世紀末～6世紀前半の大型古墳出土埴輪の様相が明らかになれば、追求できるであろう。

(3) 日置荘西町埴輪窯跡出土埴輪

概要 日置荘西町埴輪窯跡は、大阪府堺市日置荘西町を中心に広がる埴輪・須恵器窯跡群である。堺市等による発掘調査により、大型で鱗をもち口縁部高や底部高が低いといった特徴をもつ埴輪が多数出土している。いくつかの類型にわかれ、細分は十河良和によって行われているが〔十河2003〕、大きくは突帯間隔を設定し鱗が付属するもの（日置荘西町窯系）と、突帯間隔を設定せず鱗もないもの（日置荘窯系）にわかれる。埴輪の形態がⅡ群の鱗付円筒埴輪に類似するものであることや、百舌鳥・古市古墳群にみられない形態を呈することから、十河をはじめ「復古調」と評価されている。また、その系譜は今城塚古墳＝新池埴輪窯での1段4孔の透孔が共通することや、今城塚古墳出土埴輪のなかにも厚みのある底部をもつ日置荘系に類似する個体が出土していることから、新池埴輪窯からの系譜を辿れるものとして評価されている。

属性の断絶と連続性 日置荘西町埴輪窯出土埴輪における復古的特徴としては、①鱗の存在、②低口縁の個体があること、③突帯間隔を設定すること、④1段多孔であること、が主にあげられる。

①について、百舌鳥古墳群では七観古墳で鱗付円筒埴輪がみられるが、百舌鳥御廟山・土師ニサン

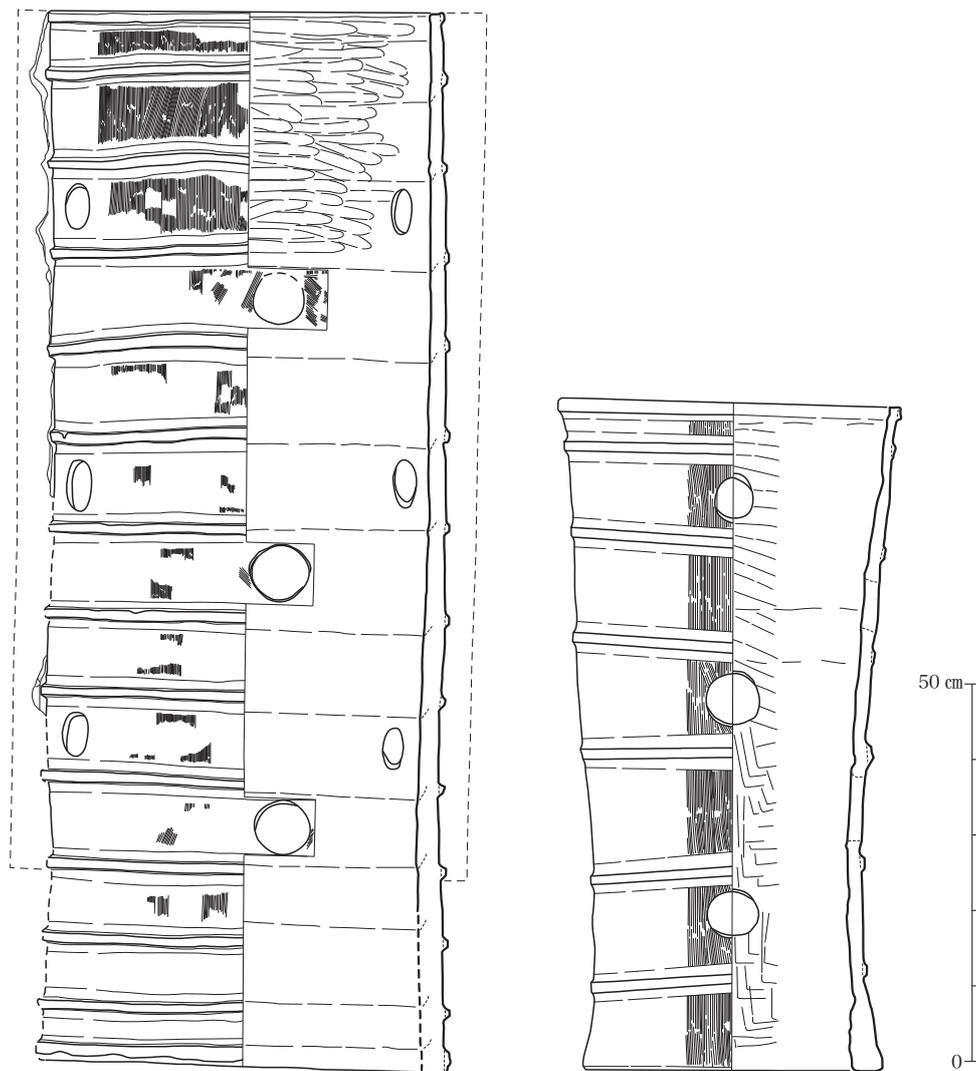


図6 日置荘西町埴輪窯跡出土埴輪 1/10

ザイ古墳では現状みつかっていない。また新池埴輪窯からの系譜を考えた場合に、新池および今城塚古墳でも鱗付円筒埴輪は出土しておらず、断絶があると判断できる。

②について、日置荘西町埴輪窯出土埴輪はいくつかの系統に分類できるが、そのうちのひとつに口縁部高が低い一群がある。概ね1/2突帯間隔で口縁部高を割り付けている。ただし、底部には低位置に1～2条の突帯がめぐり、日置荘西町系の特異な点である。しかし、鱗の貼り付けはその上部の突帯から貼り付けられており、ここまでを通常の底部とみなすと底部高は突帯間隔より高いものでII群埴輪にみる割付3式の個体に類似する。このような個体は、前述した通り埴輪編年IV期の百舌鳥御廟山古墳等に一時的にみられるが、それ以降は確認できず、今城塚古墳にもみられない点で断絶する属性であることがわかる。

③について、V群埴輪の多くは断続ナゲ技法が主流になるが、前述の通り突帯間隔設定技法は少ないながらも認められる。とくに系譜的な繋がりを指摘できる今城塚古墳で突帯間隔を設定する個体が見られることは、属性が連続的であることを傍証する。

④について、1段多孔であるものは限られるが、そのなかに今城塚古墳が当てはまるため、これも当該期の属性としては異例であるが、連続性を指摘できるものである。

評価 以上をふまえると、日置荘西町埴輪窯の復古的属性にも連続性のあるものと断絶を経たものが混在する状況を確認した。すなわち、鱗や低口縁といった属性は断絶を経たものであり、突帯間隔設定技法や1段多孔といった属性は今城塚古墳からの連続性を追える属性である。新池埴輪窯からの系譜を認める見解が多いが、これを認めない立場〔廣瀬2021〕もあり、その場合は後者の連続性も絶たれることになる。仮にそうであれば、日置荘西町埴輪窯は完全な復古であり、また後者の属性をどのようにして復古させたかの説明が求められる。その視点をふまえても、筆者は日置荘西町埴輪窯が新池埴輪窯の系譜上にあると考える。

しかし、断絶を経た属性については、盛行期からすでに200年程度が経過しており、4世紀後半の古墳に樹立する埴輪群を視認しない限り、製作が困難なものと思われる。ただし、低口縁の鱗付円筒埴輪はIV-1期の復古的埴輪生産の結果を参考にした可能性がある。さらに特徴的な低位置突帯や人物埴輪は関東地方の影響も指摘されており〔十河2003〕、新池埴輪窯の生産集団を母体とする複数の技術系統をもった集団が協同するようなイメージももてる。とくに断絶する属性の復古がどういった経緯に基づくのかは課題であるが、日置荘西町埴輪窯出土埴輪は新池系の復古的埴輪生産の系譜上にあって、さらなる復古属性を追加したような産物であると評価できる。

(4) 小 結

以上、3つの事例をあげて復古再生を検討した。なかでも、ウワナベ古墳出土埴輪は様々な要因を考慮して復古再生的埴輪生産の結果である可能性が高い。また、今城塚古墳出土埴輪では復古の場合分けが必要であることを提示し、日置荘西町埴輪窯出土埴輪では、復古的属性を追加していく状況が読み取れた。そもそも、今城塚古墳にみられる復古的属性も、地域としてみた場合には復古であるように見えるが、王陵級埴輪生産集団のなかでは、細く存在する系統下にある連続性を指摘した。王陵級埴輪生産集団の実態解明は、供給先の陵墓調査が進まない限り困難であるが、復古的属性を維持、あるいは追加していく状況を3つの事例から垣間みれたことは重要である。とはいえ、これらは主体的に連続性のある属性ではなく、一定程度古いものと認識された上で採用されている可能性が高い。その認識自体が復古再生の理念に基づくものであるならば、完全な断絶を伴わなくとも「復古的」と評価することは問題なかろう。それが、広く共有されるわけではなく、大型古墳を中心とする王陵級

埴輪生産集団の極一部に継承されていくものであれば、その背景にはやはり伝統を重んじる集団（いわゆる天皇系譜）の存在が確かにあるとも評価できる。

2. 埴輪の再利用とその事例

埴輪は供給される古墳のために生産されるのが原則であるが、樹立後は地表に露出した状態となるため、再利用される場合がある。ここでは大和北部地域の事例を紹介し、復古再生の意義を検討する材料としたい。

（1）赤田横穴墓群出土埴輪

菅原・秋篠地域に含まれる奈良市赤田町に所在する横穴墓群で、棺として土師質亀甲形陶棺を採用するものが多いことから、土師氏の墳墓であると想定される。概ね6世紀後半～7世紀にかけて築造される。

このなかで、7・19号墓に埴輪の再利用が認められる。7号墓では7世紀中頃の小型陶棺の脚部に、破碎したV群円筒埴輪を敷いた状態で確認した。また、19号墓では玄室の木棺台の前面にV群の朝顔形埴輪と人物埴輪を立てた状態で再利用していた。19号墓は出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、玄室が小さくなっていることから7世紀中頃以降であると考えられる。

（2）狐塚横穴墓群出土埴輪

奈良市山陵町に所在する横穴墓群で、そのうちの2号墓（7世紀前半）に埴輪の再利用が確認できる。2号墓は玄室に陶棺を2つ埋葬しているが、床面に破碎したⅢ群埴輪をばら撒き、その上面に土を入れて整地してから陶棺を置いている。つまり、赤田横穴7号墓のように直接陶棺の脚部に埴輪を噛ませているのであれば、高さ調整のため利用した可能性も残るが、今回の事例は機能的な意味は全くなく、なんらかの意図をもって行われた行為であるとみなせる。同様の事例は、歌姫町の赤井谷横穴1号墓（6世紀後半）でも確認されている。

（3）秋篠山陵遺跡出土埴輪

奈良市秋篠・山陵町に所在する集落遺跡で、ここでは主にⅢ群の大型円筒埴輪が井戸転用材（報告では水溜用）として再利用された状態を確認している。転用された埴輪の内部からはTK43～TK217型式の土器が出土しており、概ね6世紀後半～7世紀の転用事例とみられる点で、前述した横穴墓群での再利用時期と一致する。

（4）富雄丸山2号墳出土埴輪

奈良市丸山一丁目に所在する後期古墳で、片袖式の横穴式石室をもちTK10～43型式の土器類が出土していることから、概ね6世紀中頃～後半の古墳である。石室前庭部からまとまって埴輪が出土しているが、鱗付円筒埴輪や形象埴輪など隣接する富雄丸山古墳（4世紀後半）に類似する特徴をもつ。このことから、当該期に製作したものではなく富雄丸山古墳の埴輪を再利用した事例であると考えられる。石室前庭部に埴輪を配置する事例は、奈良県三郷町勢谷茶臼山古墳などにもみられるが、本事例は埴輪を転用する点で特異であり赤田横穴19号墓に通ずる再利用形態である。



図7 赤田横穴7号墓（左）と19号墓（右）の埴輪出土状態

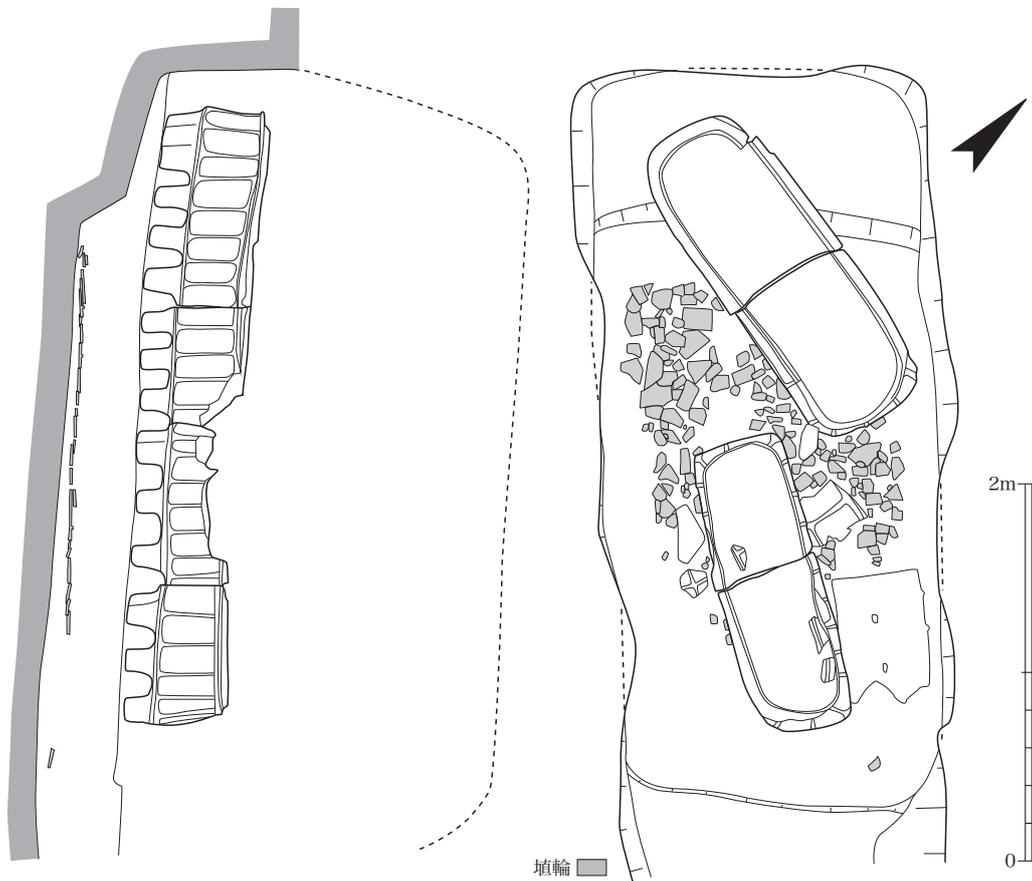


図8 狐塚横穴2号墓の埴輪出土状態

(5) 小 結

以上、大和北部地域では埴輪を再利用する事例をいくつか確認することができる。出土埴輪の特徴や遺構の性格は異なるが、いずれも再利用された時期が6世紀後半～7世紀に限定される点は注目できる。つまり、この地域の当該期には埴輪を再利用することに意義を見出した集団が存在すると考えられる。とくに横穴墓群や秋篠山陵遺跡は菅原・秋篠土師氏に関わる遺跡と評価できるため、それとの関連性が高い。

3. 埴輪の復古再生・再利用と土師氏

(1) 復古再生の類型

まず、埴輪の復古再生に対する類型は以下の通りにまとめられる。

(A) 系統的復古再生型：同一系統であると判断できる状況下において、断絶を経たデザインの継承が認められるもの。

(B) 地域的復古再生型：一地域における埴輪生産集団は必ずしも同一系統であるとは限らず、地域としてみた場合に見かけ上は復古再生しているが、系統的には連続性のある可能性があるもの。

ウワナベ古墳出土埴輪はAかつB的要素も含む良好な復古再生事例であるといえる。日置荘西町埴輪窯跡群出土埴輪はA、今城塚古墳出土埴輪はBに分類できる。ただし、とくにBのみで復古再生を述べる場合、今城塚古墳のように背後に系統的な連続性を認められる可能性があり、必ずしも復古再生であると評価できない。今城塚古墳は総合的な検討から真の継体天皇陵である可能性が高いことを最大限に評価した結果、その背後に王陵級埴輪生産集団の伝統性を読み取ることが可能であるが、それも現段階では実証されていない。今後、同工品分析などで一致する連続性があれば、今城塚古墳出土埴輪が系統的にみれば復古再生ではないことを証明できるが、系統的連続性が証明できないなかで、地域としてみた場合に復古再生しているようにみえる際には注意が必要であろう。

(2) 再利用からみた埴輪の意義

埴輪には以上のような復古再生が認められるが、なぜ復古再生が起こるのかを実証することは容易ではない。そこで、あわせて検討した埴輪の再利用事例からそれを紐解く要因を抽出する。

本稿では、大和北部地域における埴輪の再利用事例を確認したが、再利用されるのは6世紀後半～7世紀の限られた期間にのみ認められる。近畿地方における埴輪生産は概ね6世紀後半までに終焉するため、埴輪を利用したかったが生産されておらず再利用した可能性と、別の意図をもって再利用することを選択した可能性がある。再利用された埴輪のなかでも横穴墓で出土したものは、意図的に破壊して陶棺の下に敷いているように、本来の用途とはかけ離れた使用方法が認められる。赤田横穴19号墓のように古墳同様樹立して使用する場合はこの限りではないが、多くが埴輪本来の意図をもって使用されていない点からみても後者である可能性が高い。

何らかの意図をもって再利用されたと考えられるが、その理由を考える上で有益なのがその分布である。近畿地方において埴輪の生産を終えた6世紀後半以降、転用事例の約8割は大和北部地域と百舌鳥・古市古墳群の範囲内が占める。『続日本紀』には土師氏四腹とあり、高野新笠を産んだ土師氏は毛受腹でのちに大枝朝臣を賜ったとある。土師氏改姓記事には菅原・秋篠・大枝氏がみえ、四腹のうちひとつは記載がないが、大型古墳の築造状況からみて古市地域にあてるのが定説である〔鐘方・中島・根上1995〕。つまり、埴輪の再利用事例が認められるのは土師氏四腹に共通する特徴であるといえる。

『続日本紀』にみる土師氏改姓記事では、野見宿禰以来の由緒を述べた上で改姓を求めているように、自己の正統性を示すことに重点がおかれている。菅原土師氏の本拠地とみられる菅原東遺跡は、宝来山古墳の築造を契機として4世紀に開発された後、5世紀代に約80年の廃絶期間をはさんで6世紀に埴輪生産遺跡として復興するが、4世紀の首長居館とみられる遺構群の土地利用を意識して6世紀に集落を形成することが判明している〔村瀬(編)2021〕。このように、6世紀以降の菅原土師氏は4

世紀以来の正統性を証明しようとする意識が学際的にみても垣間みえる。

菅原以外の三腹は、遺構形成の点では不明確であるものの、埴輪を再利用する共通性が認められることは、正統性を証明しようとするひとつの行為であった可能性を指摘できる。

（3）復古再生の意義と土師氏の伝統意識

以上のように、土師氏四腹と考えられる菅原・秋篠・百舌鳥・古市地域では、土師氏としての正統性を証明する目的として過去に作られた埴輪を再利用していた可能性を見出した。このような土師氏としての伝統意識は埴輪の再利用だけでなく、赤田横穴墓群で8世紀代にまで祭祀が継続していたことからみても、同族意識の高さがうかがえる。

本稿では、埴輪の復古再生の事例とその類型を提示したが、なぜ埴輪が復古再生したのかを証明することは難しい。これはあらゆる器物に共通する問題で、痕跡として残らない精神的行為の結果である以上、復古再生であることは指摘できてもその理由は追求しきれない。しかし、埴輪の再利用事例は、同じ土師氏が過去の生産物である埴輪を自己の正統性を証明する目的で再利用した可能性が高いことを前述した。結論から述べれば、埴輪の復古再生も再利用と同様に自己の正統性を証明することや伝統意識の結果ではないかと考える。

つまり、本稿で復古再生である可能性を指摘したウワナベ古墳出土埴輪や日置荘西町埴輪窯出土埴輪は、ともに鱈付円筒埴輪である点が共通する。鱈付円筒埴輪が盛行したのは埴輪編年Ⅱ期であり、埴輪としてはこれに遡るⅠ期のものがある。しかし、Ⅰ期の埴輪は個体差が激しく、生産も不安定な段階であり、原則形象埴輪も未成立段階である。『日本書紀』に記された埴輪誕生説話が垂仁紀であることは、少なくとも6～7世紀ごろにおいて、4世紀前半～中頃の埴輪生産を最古の記憶としてとどめていた結果とも読み取れる。そして、復古再生させる対象が5・6世紀において、ともに鱈付円筒埴輪であることは、その形態自体が埴輪出現期のものとして当時認識され続けていたことを裏づける。この理解が妥当であれば、埴輪における復古再生は自己の正統性の証明や伝統意識に帰結すると考えることができる。

おわりに

本稿では、埴輪の復古再生事例を取り上げ、主に2類型3種類が存在することを示した。とくに地域に限定した視野であると、一見復古再生しているようにみえるが外的な要因による系統的連続性が認められる場合が存在することを示した。また、復古再生の意義を求めるために、埴輪の再利用事例をあげ、その行為が自己の正統性の証明や伝統意識に基づくものであることを、事例の分布範囲等から説明した。この点をふまえて、復古再生・再利用という違いはあるが、いずれも過去の埴輪に価値を見出している点は共通しており、その主体は同様に土師氏であると考えられることから、復古再生の原因も再利用と同様である可能性を述べた。

謝 辞

下記の関係者には大変お世話になりました。記してお礼申し上げます（敬称略、50音順）。

鐘方正樹 木村理 柴原聡一郎 花熊祐基 廣瀬覚 水川慶紀 山口等悟 和田一之輔

また、本稿はJSPS科研費20H01363および公益財団法人高梨学術奨励基金令和4年度若手研究助成の成果の一部を含む。

引用文献

- 大澤正吾 2021 「平城宮東院下層埴輪窯跡群の基礎的検討」『古墳文化基礎論集』古墳文化基礎論集刊行会 pp.49-58
- 大澤正吾 2022 『ウワナベ古墳出土埴輪図録-平城第60次調査L区 中堤外周埴輪列-』奈良文化財研究所 pp.1-40
- 小栗明彦 2007 「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考1』大阪大谷大学博物館 pp.153-226
- 鐘方正樹・中島和彦・根上直子 1995 「奈良市秋篠町奈良少年院出土埴輪の研究(下)」『古代文化』第47巻第6号 古代学協会 pp.24-27
- 鐘方正樹 2003 「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号 埴輪検討会 pp.1-38
- 木村 理 2020 「古墳時代中期における王権中枢古墳群の埴輪生産」『考古学研究』第67巻第1号 考古学研究会 pp.28-48
- 木村 理 2022 「古墳時代中期の円筒埴輪」『埴輪の分類と編年』埴輪検討会 pp.25-50
- 宮内庁書陵部 2022 「宇和奈辺陵墓参考地整備工事予定区域事前調査」『書陵部紀要』第73号〔陵墓篇〕 pp.51-114
- 小浜 成 2008 「菅田御廟山古墳と今城塚古墳-埴輪からみた関連性-」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』六一書房 pp.515-527
- 十河良和 2003 「日置荘西町窯系円筒埴輪の検討」『埴輪-円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析-』埋蔵文化財研究会 pp.135-175
- 高橋 工 1991 「甲冑形埴輪の検討」『長原遺跡発掘調査報告書IV』大阪市文化財協会 pp.165-175
- 奈良県立橿原考古学研究所 2008 「佐紀古墳群(教育講堂地区・ウワナベ古墳中堤~外堤)」『奈良県遺跡調査概報(第一分冊) 2007年』 pp.17-34
- 奈良県立橿原考古学研究所 2022 「ウワナベ古墳」『奈良県遺跡調査概報(第一分冊) 2021年度』 pp.1-16
- 奈良国立文化財研究所 1975 『平城宮発掘調査報告VI』 pp.1-212
- 奈良市教育委員会 2016 『赤田横穴墓群・赤田1号墳』
- 奈良市教育委員会 2022 『赤田横穴墓群 第6次調査』現地公開資料
- 奈良市教育委員会 2023 「ウワナベ古墳の調査 第2次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 令和2年度』(近刊)
- 花熊祐基 2022 「継体朝における埴輪生産の継承-復古調埴輪の再検討-」『龍谷史壇』 pp.27-53
- 廣瀬 覚 2021 「埴輪配列論再考」『季刊考古学』第157号 雄山閣 pp.99-106
- 村瀬 陸(編) 2021 「古墳時代後期埴輪生産からみた菅原土師氏の実証的研究」『研究紀要』第25号 由良大和古代文化研究協会 pp.1-108
- 村瀬 陸 2022 「コナベ古墳併行期の埴輪生産とその規格」『埴輪論叢』第11号 埴輪検討会 pp.21-38

※その他、多数の参考文献・報告書を参照したが紙幅の都合上割愛した。

図版出典

図1~4・6・8：各報告書等初出文献から再トレースし筆者作成。図5：筆者作成。図7：奈良市教育委員会2016・2022。